

# 授業評価において“就職に役立たない授業科目”として低い評価を得た「スポーツ科学演習」における評価の変動

舟橋 明男

## 要 約

著者が担当する「スポーツ科学演習」等のスポーツ種目の実技を含んだ演習の授業が、受講生の授業評価において“就職に役立たない授業科目”として全学平均よりも0.6も低い評価を得た。

そこで、改善策として、半期の授業を通じて、基本的なねらいとして「コミュニケーション能力を高めることによって、新しくよい人間関係をつくる」を第一義とし、体力や技術よりも上位に置いていることを説明した。ついで毎時間に配布する資料の回数と内容をより具体的な学習目標、学習内容、学習方法及び評価に変更した。そして、授業の最初に資料を配布して、口頭で授業のねらいである「コミュニケーション能力を高めること」その結果としてその能力が高められれば「就職時にも、就職後にも役に立つはずである」と解説した。

そして、授業の形態は積極的にコミュニケーションをとらなければ、授業に入っていけない環境を設定した。最初、受講生たちはとまどい、動こうとしなかったが、次第に練習の

相手を自ら声をかけて、練習での約束を話し合い、協力し、学習の目標に近づいていった。

このような授業を行った後の授業評価では、設問3「履修した動機は、就職のために役立つ科目だったから」において全学評価平均と同じになった。

この結果は受講生が授業で行っているコミュニケーションなしでは成立していかない授業から実感して評価したものではないと思われる。最大の要因は「コミュニケーション能力を高められれば、就職時にも、就職後にも役に立つはずである」と解説し続けたことにあると思われる。

そうであるならば、考察しなければならないことは、果たして「コミュニケーション能力を高めれば、就職時にも、就職後にも役に立つはずである」ことが適正かどうかである。著者が今までの経験から、感じていることであっても、本学の学生にそのことが当てはまるかどうかについて十分に検討しなければならない。できるならば、本学の就職部が共通に身につける能力として、いくつかの能力を提案しなければならない時期にきている。検

討される候補の中に、コミュニケーション能力やスキルなどが含まれるのではないかとと思われる。

提案された能力は全学の学生と教職員に共有化され、それらが各種の授業の中で実践されていくことが望ましいと考える。その共有化されている能力の到達度は定時的にチェックされるであろう。

## 目 的

著者が担当した「スポーツ科学演習」等はスポーツ種目の実技を含んだ演習の授業である。2003年度後学期の授業評価において“就職に役立たない授業科目”として全学の平均よりも0.6も低い評価を得た。

そこで、評価を高めるために、2004年度前学期開講授業である「スポーツ科学演習」及び類似の名称の授業で改善をする。それによって期待される数値目標は全学平均値の3.3である。本研究の目的は、受講生が“就職に役立たない授業”から“役立つ授業”へと評価を変えていった、ひとつの授業改善内容とプロセス及び問題点を、明らかにしようとしたものである。

## 方 法

対象の授業：

著者が担当した2003年度後学期と2004年度前学期の「スポーツ科学演習」及び類似の名称の授業。受講生は入学1年目がほとんどである。

2003年度後学期の授業方法：

主体的、積極的に行動すること、コミュニケーション能力を高めること、この2つをねらいにして、授業構成を、主体的積極的にコミュニケーションをとらなければ、授業が成立していかない環境を設定した。資料を5回配布した。

2004年度前学期の授業方法：

半期の授業を通じて、基本的なねらいとして「コミュニケーション能力を高めることによって、新しくよい人間関係をつくる」を第一義とし、体力や技術よりも上位に置いていることを2003年度後学期の授業と同様に説明した。

改善策として、毎時間に配布する資料の回数（10回）と内容（学習目標、学習内容、学習方法及び評価）を具体的に示した。そして、授業の最初に資料を配布して、口頭で授業のねらいである「コミュニケーション能力を高めること」その結果としてその能力が高められれば「就職時にも、就職後にも役に立つはずである」と解説した。

## 結 果

授業の形態は、主体的、積極的に行動して、コミュニケーションをとらなければ、授業が成立していかない環境を設定した。

1 授業で使用する用具は主体的に運ぶ

授業で使用する用具はその会場に用意されている種目（例：バスケット）もあるが、ほとんどは体育館1階入口左の用具室から、テニス・コートなり、バドミントン・コートに

運ばなければならない。運ぶ人は伝統的に学習者である。運ぶ人を決めるのは、高校までは多くの場合、担当教師が平等公平に割り振ってきたのが、実態とってよいであろう。

著者の授業では、最初の授業時に受講希望生が集り、シラバスに基づいて、「スポーツ科学演習」等の共通なオリエンテーションが行われた。種目別のオリエンテーション時に受講選択生には「次の時間、気が付いた人は、用具をコートに運んでください。」とアナウンスしておいて、「担当教師が平等公平に割り振り」などの指示をしなかった。

第2回時以降の学生の行動パターンはほぼ同じで、次のように進化した。

- 1 戸惑い
- 2 当惑
- 3 退屈な、そしてイライラした気分からの脱却行動
- 4 他の学習者への波及
- 5 用具の運搬の習慣化

第2回の授業時に用具が運ばれていることは、少ない。受講生がどのような状態かといえば、ただ、1年次ではバラバラに座って静かに、授業者が来るのを待っているだけである。資料を配布して、「主体的、積極的に行動すること、コミュニケーション能力を高めること、この2つがねらい」を説明し、時間ごとの「学習目標、学習内容、学習方法及び記録用紙の記入・提出・評価」を説明する。例えば、学習者は練習の相手1名を学習者集団の中から選ぶ。そのためには学習仲間の中のひとりに話し掛けて、一緒にプレーをする友を得なけ

なければならない。

そのことは学習者には理解できているが、動けない。積極的には動く気配がない。当惑している。その理由は、いままで、高校までの体育の授業では、名簿の順だとか、2列の縦隊とかをつくって、授業者側が決めてくれていたので、主体的に積極的に動かなくてもよかった。かえって、動いてはいけないのである。この友達と練習をしたいと申し出ても、聞き入れられることは少ない。

用具の運搬法については、いろいろ工夫されてきた。一例をあげると、各自1本のラケットが用意されていると、出席者は用具室前から自分の分だけをコートに持参し、使用後には元に返却する。これであると、コートに放置されているという状況は起こらない。個人レベルの段階ではよい方法である。この能力は高校までに身につけていると判断した。

大学では、同属意識の働いている集団レベルでの行動を期待した。それは、仲間のために自分も役立っているという経験をしておける設定にしたいと考えて、本研究対象の方法では、気づき、損得ではない行動規範の形成を期待した。しかし、それを主なねらいにはしなかった。なぜならば、まもなく動くからである。

学習者集団の中で、自分ひとりが目立って行動することに、ためらっている状況である。しかしながら、なにもしないで動かないことは気まずさを生み、イライラしながらも、授業者からは指示も命令もない。無意味と思われる時間が流れていく。

授業者も同じくそれに耐えて、変化がおきる気配まで忍耐が必要である。学習者が動き始めるまで、授業者がサポートに積極的にはなれない。その内に学習者の一部が、退屈で、しかもイライラした気分耐え兼ねて、身近な仲間働きかける。一緒にやろうと決まると、自分の提出用記録用紙に相手の学籍番号と氏名をたずねて記載する。

この段階まで進行したペアは次の課題に進むために、用具が必要になり、自主的に階下の用具室に全員の分を運ぶ行動を起こすことになる。

最初の2～3回は同じ人になることがあるが、更衣後にコートへ移動する時点で、用具が運ばれていないことがわかると、授業開始よりも早く来た学習生によって、運ばれていく。彼らは授業開始チャイムまで復習をしていることが多い。その段階に達していることを確かめて、運搬した人の名を記録する欄を設け、その時間の素点（最大10点）に2点を加えることを知らせる。その加点で学習者の行動に大きな変化はない。

例外的に、下記のような単一例がみられた。

授業開始初期の時点で、授業場に急ぐ授業者と学習者がならんだときに、挨拶後、学習者から「用具を運びましょうか？」と声をかけてきて、「みんなのために、そうしてあげますか」と答えた場面であった。

2 積極的に話し掛けて、練習、試合の相手をお願いします。  
次のような事例が1例あった。ほとんどの

学習者はペアを決め、記録・提出用紙を持って、次の課題に散らばっていく。そのような場面で、奇数のためにペアが組めなかった人が残っていることがある。

そんな場面では、多くの人は、「相手がいないので、3人でもよろしいですか」とたずねにやってくる。「いいですよ」と答えるだけで、その学習者は交渉して、3人組でうまく処理をする。

しかしながら、たまにコートの壁に背中をつけて、腰をおろし、所在なげにしている学習者がいる。持っているラケットの面で反対の手をこぶしにして、叩く動作になると、近寄って声をかける。「相手がいませんか?」。それには答えず、そんなことは見ればわかっているでしょう、とは言わずに「相手を決めるのは、先生の仕事でしょう!」と批判してきた学習者がいた。

確かにいままでは自分から動かななくても、指示があつて、サッサと練習もできたし、無駄な時間がなく、効率のよい授業を経験してきたに違いない。それと比較して、自分から相手を選んで、互いに練習の相手になって欲しいことを話し、「ああいいよ」ということになって、自己紹介をし、記録用紙に記入するために、互いに相手の学籍番号と氏名を聞き出して、書き、その名前を定期試験の問題のひとつにするとは、面倒くさいし、おかしいのではないかと座っているときに考えていたという。

その学習者と授業者はしばらくの間、対話することになる。この授業で身につけて欲しい

能力は、知らない人と言葉によってコミュニケーションして、共に選択したスポーツで長いラリーを楽しんだり、利き手でない腕にラケットをもって練習をしたりする。今は1対1だが、パートナーと組んで、2対2ですること、計画している。もう少し進めば、勝ち負けを明確に決められる競技用のルールではなく、友好親善を目的としたルールを創ってもらって、試合もする。そんなときも、試合の相手とどのようなルールするかを両方で決めてもらう。

その学習者からもいろいろな質問と意見が出た。その話し合いの中で、高校と大学の違いを自ら見出して、納得しようとする方向性を示し始めて、以後は積極的になろうとする行動がみられたが、本人も満足には至らなかったようだ。半期の授業の後半には遅れてきた級友に声を掛けてもらおうと、声を出して返事はしないが、行動は一緒にできるようになった。

練習をしてくれる相手やペアを組む仲間は毎時間あるいは2～3時間すれば、変えることを要求する。それによって、知らない人とコミュニケーションをもつ経験を豊かにすることができた。

## 考 察

- 1 コミュニケーション能力の現状段階から変容段階に移り、能力向上段階に達するプロセス

九州産業大学入学生のコミュニケーション潜在能力は著者の経験（国公立、昼間夜間、2年4年制の6校）の範囲では、どこよりも高いという感触を持っている。しかし、入学

直後の現状段階はほとんど差がない。例えば、テニスで2人組をつくる場合、バスケットで5人組をつくる場合、すぐにはほとんどが動けない。多くの受講生は「先生が決めてください」「指示してくれれば早いのに」「こんなときは先生がしきるべきでしょう」と思っているが、それを口にだす受講生は少ない。

後学期開始の授業になると、学部によって差がみられる。動くことができるのは、前学期でなんらかの仲間づくりを経験しているところである。実験で同じグループであったとか、レポートを共同で調べて作成したとかで仲間になった人がいた場合である。既に名前を知っており、その人の性格がわかっているからであろう。その仲間がまず動き始めると、それがトリガーとなって、次第に広がっていく。

現状段階から変容段階でかわされる会話は、単純で直接的である。例をあげてみると「一緒にしませんか」「ペアを組みませんか」「パートナーでやりませんか」「もう誰かと組みましたか」「下手だけれど、私と組んでくれませんか」と話し掛け、誘い、依頼している。この段階で15回の授業が終わりをむかえることが多い。

次の能力向上段階になると、お願いしたり、特色を述べて呼びかけたりするようになる。「仲間に入ってください。お願いします。」「ぜひ一緒にしたいです」「きっと楽しくプレーができると思いますよ」「われわれのグループに入りませんか。あのキャプテンはアタックとディフェンスのフォーメーションを5つずつつくれる力がありますよ」「私はあなたの実力をかつ

ていますよ。とくに3点ショットは抜群ですからね。力になってください。優勝して10点もらいましょう。」「背が高いから、リバウンドで、チャンスをいかしませんか」

新入生では15回の授業の内、最終部の2～3回になって、少数ながらこのようなコミュニケーション能力向上段階に入ってくる。十分な能力向上を計れるのは2年次以降になる。その間に他の授業やクラブ活動、寮生活でも仲間づくりが進んでおり、新しくよい人間関係をつくることができるようになる。

しかしながら、4年次の卒業年次になって教育職員免許状取得上必要になって申請してきた受講生をみると、必ずしも、大学生活の長短ではなく、経験の質と量によると思われた。教育実習後、授業に復帰しても、コミュニケーション能力の重要性を痛感してきていても、積極性を発揮した経験がないためにコミュニケーション潜在能力を顕在化できない例がみられた。

## 2 コミュニケーション能力が高められれば、就職時にも、就職後にも役に立つのか？

著者が担当する「スポーツ科学演習」等のスポーツ種目の実技を含んだ演習の授業が、受講生の授業評価において「就職に役立たない授業科目」として全学平均よりも0.6も低い評価を得た。

そこで、改善策として、半期の授業を通じて、基本的なねらいとして「コミュニケーション能力を高めることによって、新しくよい人間関係をつくる」を第一義とし、毎授業の最初に資料を配布して、口頭で授業のねらいは「コ

ミュニケーション能力を高めること」である。その能力が高められれば「就職時にも、就職後にも役に立つはずである」と解説した。

授業後の授業評価では、設問3「履修した動機は、就職のために役立つ科目だったから」の評価は前回と比較して、0.6上昇して、全学評価平均値と同じになった。

この結果の最大の要因は「コミュニケーション能力が高められれば、就職時にも、就職後にも役に立つはずである」と解説し続けたことにあると思われる。決して、設問とおりに「履修した動機は、就職のために役立つ科目だったから」ではなく、授業評価時点が授業の最終段階であったので「履修した結果、授業のねらいであるコミュニケーション能力を高められれば、就職時にも、就職後にも役に立つはずだ」という説明を信じたから」というのが実態に近いと思われる。

尚、「スポーツ科学演習」の授業は選択科目であり、学生が履修をするかどうかの判断材料のひとつにシラバスが用意されている。それ以外に学生たちは友人や先輩たちの個人的な意見を重視している。そのような実態から、教育側からの一方向のシラバスに受講者側の授業評価値を併記すれば、受講判断に役立つものと思われる。

次に、考察しなければならないことは、果たして「コミュニケーション能力が高められれば、就職時にも、就職後にも役に立つはずである」といえるかどうかである。このことは著者が今までの経験から、感じていることであって、一般的にそのように結びつけてよ

いのかどうか。もし、よいとしても、本学の学生にそのことが当てはまるかどうかについて検討しなければならない。

その点については、本学の就職部事務部長経験者とディスカッションをしたところ、経団連の提言<sup>1)</sup>からも、就職部に所属して、多くの学生を支援した経験からも、コミュニケーション能力が必要な能力のひとつとして位置づけられるとおもわれる。同じ意味ではないかもしれないが、2004年12月21日の新旧学長就任退任の式典において、佐護新学長はコミュニケーションをあげて重要性を強調した。

卒業までに必要な能力を列記してみると、基礎能力と専門を生かす能力に分けて、次のような項目をあげることができる。

## 1 基礎能力は5つ

### 1) 主体的で積極性（個人とグループ）

主体的に考え、積極的に試みる。それには次の4段階がある。

- (1) 気づき、思いつき、発想、予測  
課題の気づき。おう盛な知的好奇心。
- (2) 方法、戦略、プロセス、企画
- (3) 実施、実行、部分的修正法  
解決行動、粘り強さ、体力、選択、判断、決断
- (4) 評価、次の発想、フィードバック

### 2) 必要を感じて学習する態度と内容と方法

具体事例から抽象へのプロセス学習  
「まんべんなく」よりも「偏重型」への移行

### 3) コミュニケーション能力

自ら主体的、積極的に話しかける。  
相手の話を聞く。受容的な態度。  
未知の人との良き人間関係の形成。  
ラポールの形成で人脈を。  
交渉能力。説得のスキル。  
英語による会話。ITを利用した交流。

### 4) 人間としての魅力（性格、個性）

笑顔。  
協同作業。  
許容範囲の拡大。多視点で柔軟性。  
広く、一部分深い教養。

### 5) インターネットを用いたネットワークの形成

検索。複眼的情報の整理。選択・判断。

### 6) リーダーシップの発揮とメンバーシップの育成

## 2 専門を生かす能力

- 1) インターンシップ。起業イントラネット（学生社長）  
チャレンジ精神
- 2) 将来計画の立案  
歴史から学ぶ将来の見通し
- 3) 最先端の動向
- 4) 異専門混合によるプロジェクト  
まとめる。
- 5) コンプライアンス（法令順守）
- 6) エビデンス（根拠を持つ）
- 7) アカウンタビリティ（責任ある説明。理解してもらえる説明）

これらを参考にして、精選し、できるなら、本学の就職部が学部を問わずに共通に身につける能力として、いくつかの能力を提案しなければならぬ時期にきている。その中に、コミュニケーション能力やスキルなどは候補として含まれるものとする。

提案された能力は全学の学生と教職員に共有化され、それらが段階的に、あるいはコース別に、各種の授業の中で実践されていくことが望ましいと考える。その共有化されている能力の達成度は定時的に自己評価と他者評価でチェックされ、目標達成の計画と戦略のためにフィードバックされる。

最後に、コミュニケーションは将来の人脈をつくる。その人脈は同じ学部だけでなく、異なる学部の人を知っている方が価値も大き

いことだろう。そのためには現在の受講制限の緩和、特に学部の縛り枠をはずすことが必要であろう。学生が自ら身につけたい能力を選び、あるいは教育側の薦めを参考にして、キーワードで全学のシラバスの中から検索して、受講できるシステムが必要である。

## 謝 辞

考察の部分で本学の就職部事務部長経験者である山本氏とディスカッションをしていただいたことに感謝し、その内容を記述していることを明記しておきます。

## 文 献

- 1) (社)経済団体連合会「グローバル化時代の人材育成について」2000年3月24日